



福岡市政記者各位

令和8年3月10日
経済観光文化局文化振興課

令和7年度 福岡市文学賞 受賞者の決定 及び 贈呈式の開催について

令和7年度福岡市文学賞の受賞者が決定しました。下記のとおり贈呈式を行いますので、ぜひ取材いただきますよう、よろしくお願いいたします。

■ 受賞者

部門	受賞者	作品名
小説	にぶ あきひこ 丹生 秋彦	『高塔幻視』
詩	おがた みかり 緒方 水花里	『放生会』
短歌	かみかわ りょうこ 上川 涼子	『水と自由』
	まつもと ちえの 松本 千恵乃	『霧のメロディア』
俳句	よしだ りつ 吉田 律	『一点』
川柳	みほら どうなん 三原 洞南	『一会の旅』

■ 贈呈式

日時：令和8年3月28日（土） 13時～

場所：ソラリア西鉄ホテル福岡 彩雲「月」

（福岡市中央区天神2丁目2-43 ソラリアプラザ8階）

○記念作品集の刊行

受賞者の作品を収録した「受賞記念作品集」を、4月上旬以降に福岡市総合図書館と各分館で貸し出します。（情報プラザ等でも閲覧可）

○福岡市文学賞について

【制度創設】 昭和45年度

【受賞基準】 本市または福岡都市圏に居住し、優れた著書の出版により顕著な文学創作活動を行ったと認められる個人

添付資料

別紙1 令和7年度（第56回）福岡市文学賞の受賞者について

別紙2 令和7年度（第56回）福岡市文学賞選考経過

【問い合わせ先】 経済観光文化局文化振興課 平井
電話：092-711-4664 内線1801



丹生 秋彦【小説】

昭和33年生まれ、太宰府市在住
『季刊午前』同人、『たつきりあ』主宰
平成10年 四谷ラウンド文学賞（第一回）受賞
【著書】小説『夢の傾斜』『天馬』『シドニーハウス』
詩集『新羅の壺』『球体のアリス』等



緒方 水花里【詩】

平成10年生まれ、福岡市在住
福岡県詩人会所属、インカレポエトリ所属、サークル「ジョイフルに集う人たち」在籍中、同人「でっど・ぼえつつ・そさいえてい」在籍中
令和5年 金澤詩人賞入賞
第4回SDGs「誰ひとり取り残さない」作文・小論文クリエイティブコンテスト入選
令和6年 第36回船橋聖一顕彰青少年文学賞受賞
第20回「文芸思潮」現代詩賞入選
清流の国 ぎふショートショート文学賞入賞
第5回食とコミュニケーションエッセイコンテスト特別賞



上川 涼子【短歌】

昭和63年生まれ、福岡市在住
未来短歌会所属、「波長」同人
令和6年 第十二回現代短歌社賞
令和7年 第五十一回現代歌人集会賞



松本 千恵乃【短歌】

昭和32年生まれ、福岡市在住
現代歌人協会会員、日本歌人クラブ幹事、現代歌人集会会員、福岡県歌人会理事（事務局長）、福岡文化連盟会員、未来短歌会会員、「ざんぼあ」会員、「梁」会員
令和3年 第1歌集『蝶の声』により日本歌人クラブ九州ブロック奨励歌集賞受賞
令和7年 第2歌集『霧のメロディア』により福岡県歌人会歌集賞優秀歌集賞受賞
【著書】『蝶の声』（角川書店）



吉田 律【俳句】

昭和27年生まれ、糟屋郡粕屋町在住
俳人協会会員、「空」編集同人
平成21年 「空」入会
平成24年 第1回「空」新人賞、第1回「空賞」受賞
平成26年 第5回俳人協会福岡県支部評論賞
令和3年 第35回 俳壇賞



三原 洞南【川柳】

昭和9年生まれ、福岡市在住
平成22年 西日本新聞「川柳十七会」入会
平成23年 高宮川柳教室 入会
平成24年 福岡番傘川柳会 入会
令和2年 番傘川柳本社 同人（現・フリーに）

令和7年度（第56回）福岡市文学賞選考経過

【小説部門】

今年度は十五名から十八作品の応募があった。各選考委員が下読みをし、三から五作品を候補作として持ち寄ることにした。後藤克之『後藤克之集 第一巻』（文芸同人誌『絵合わせ』）、嗣人『文豪は鬼子と綴る』（竹書房）、馳月基矢『深川ふるさと料理帖 輪島屋お夏の潮の香こんだて』（徳間文庫）、一路真実『ハートのセーター』（星屑書房）、清水朔『闇の代理人 儉安—TOAN—』（角川文庫）、丹生秋彦『高塔幻視』（弦書房）、以上六作品が候補に上がり、順次検討していった。

『後藤克之集 第一巻』は冒頭の「もってこーい」や「あの夏の匂い」など、作者の体験に基づいたと思われる作品は、その舞台背景や心理描写が緻密で鮮やかで印象深かった。

『文豪は鬼子と綴る』は大正時代の博多を舞台にしたホラーミステリーである。書齋型の文豪と修猷館中学の生徒が主人公で、福岡の市電や筥崎宮などよく知られた場所が出てくる。会話の面白さが際立ち、筋立ても巧みだった。

『深川ふるさと料理帖』は時代小説で、江戸の料理屋で働きながら許嫁の帰りを待っている輪島出身のお夏が主人公である。一つの話に一つの輪島の郷土料理が紹介されるという組み立てである。

『ハートのセーター』は、四つの短編を載せた作品集で、今を生きる若者の生きづらさや、掴みどころのなさ、秘めたトラウマなどを独特の切り口で描いている。「ブロークンメモリーズ」や「黄泉休暇」のアイデアは秀逸だった。

『闇の代理人 儉安』は、明治二十年代の、維新から間もない混沌とした時代に暗躍した、子供を誘拐し人身売買する組織との戦いを描いた冒険活劇である。四字熟語を冠された六章からなり、伯爵家の庶子とその友人で中国語や英語に堪能な世慣れた若者が登場し、誘拐された子供の行方を追っていく設定で物語が進んでいく。浅間山の噴火や地震、台風、火事で被災した子供たちの有様、当時の文化や風俗、江戸時代の名残を残しながらも急速に西洋化しようとする世の中の有様も的確に描かれている。登場人物は多いが、それぞれに上手く書き分けられて魅力も十分に伝わってくる。手に汗を握る展開が最後まで続いていく。

「高塔幻視」は、ハードカバーの帯の通り、『「場」の持つ密度から出発し、忘却された時空に愛惜すべきものを照射する五つの物語』で構成されている。それぞれ「高塔幻視」「虚ろの砦」「兵馬備少年の冬」「ユララ」「ゲージング」と題された物語を生み出す「場」は、佐世保の海軍無線塔、霧島火山、兵馬備、エアーズ・ロック、シアトルと大きく振れる。

表題作「高塔幻視」の主役は、第一次世界大戦終結後に造られた、それぞれ百メートルを超す三本の強固なコンクリートの塔である。今は戦争遺跡として残るその塔に魅入られた人物と、その塔に触発されて、周辺で起きた終戦直後の外地からの引き揚げといった物語が綴られる。塔の説明は詳細で丁寧であり、学術的な色合いも感じられるが、それは作者の塔に対する熱を感じさせるに十分なものでもあった。

「ユララ」はエアーズ・ロック観光のために造られた「ユララ・リゾート」を舞台に、予備役招集の前の一時の休息を欲した男の、次第に追い詰められていく心理、絶望、破滅を、赤く乾いた大地を背景に乾いた文体で描く。

揺るぎない構成力と確かな文体で最後まで描き切る力量はすべての作品に共通して圧倒的だった。全体を通して底辺に流れるテーマは戦争や暴力であり、現在にあってもなお避けては通れない大きなテーマであるが、それに真正面から向き合う作者の真摯で深い眼差しが随所に感じられた。

最終的に『闇の代理人』と『高塔幻視』を候補作として推す意見があり、討論の結果、『高塔幻視』を受賞作とした。

【詩部門】

今回の選考対象になった詩集は刊行順に、河合拓始『何か、十一篇』（書肆侃侃房）、緒方水花里『放生会』（七月堂）、村雨祐次郎『さあ、本を閉じて終わりにしましょう』（私家版）、白水ま衣『paradise』（私家版）、田中ハル『エスチュアリー』（私家版）の五冊である。

選考では、まず各委員が対象作品それぞれについて意見を述べ、その後の討議を経て、最終候補は『放生会』、『paradise』の二冊の詩集に絞られていった。この二冊に対し、慎重に検討をおこなった。

『放生会』は、圧倒的な「語り」の力を持った詩集である。その力は、連作「食べる吐く」において「三段組」という異例の形式となってあらわれる。ここでは、「助けてたらこパスタ」、「スコーンと怒り」など、身体的な痛みとユーモアが交叉しながら、ドラマティックな展開が続く。また、このパートは、私小説のように作者自身を描いているようにも読める。一般に、作者と作中主体の距離が過度に接近すると読者が置き去りにされる傾向があるが、それを表現上の面白さによって克服している。最後に置かれた表題作「放生会」では、「私だっけいのちである」という一節が印象に残る。徹頭徹尾、「生命力」に支えられた詩集と言える。

『paradise』は、今回の五冊の中で、修辞の技術において最も抜きん出ている。「行」や「連」のつくり方も巧みで、日常から自然に非日常に移行する手法は見事である。「馬鈴薯を触る」には、「初めて触れた恋人の手は／わが家の台所に大体いつも転がっている／馬鈴薯の手触りに似ていて／それ以来／馬鈴薯を触るのが、少しだけ 怖くなった」と、ドキッとさせるような描写で読者を詩の中に引き込む。また、「間宮馬之助」など娯楽的な作品もあり、構成的にも優れた詩集である。

今回、最終候補となった二冊の性格がまったく違っていることから、議論は白熱した。『paradise』の技術に裏打ちされた完成度の高さについては、選考委員全員が一致した見解を見せた。一方、『放生会』は、技術面ではやや荒削りに見えるものの、詩の既成価値そのものを強く揺さぶる作品に全員が打ちのめされてしまった。それは、技術優勢によって硬化した詩の現在への、苛烈な挑戦なのかもしれない。詩を読む楽しさやインパクトなど、多角的な視点から徹底的に議論を尽くした結果、最終的に『放生会』を受賞作とすることを決定した。

*『何か、十一篇』は、レイアウトや音感にこだわりを持って書かれているが、やや冗長に流れているような印象を受ける。『さあ、本を閉じて終わりにしましょう』は、現代の失恋を描いた抒情詩。近代詩のように素朴でいい詩もあるが、詩の完成度として最終候補の二作には及ばなかった。『エスチュアリー』は、映像的で静謐な作品が並ぶ。冒頭の作品の質が高かっただけに、後半の短詩の失速に物足りなさを感じた。

【短歌部門】

対象となったのは四冊。松本千恵乃『霧のメロディア』、太宰コサム『数に限りがございます』、岩永貴美子『始発駅』、上川涼子『水と自由』。

まず、4冊それぞれについて、印象的だった歌を挙げながら講評をおこない、次に歌集全体の構成などを挙げながら評価される点と、今後の課題について意見を述べた。次に歌集の特徴を比較検討し、本年度の受賞作品を決定した。協議の結果、上川涼子『水と自由』・松本千恵乃『霧のメロディア』の二作を同時受賞とすることにした。

上川涼子『水と自由』

- ・牡蠣の身のごとき曇り日その下に牡蠣殻のごとく海辺(かいへん)はあり
- ・鞍を外しし背中ひろがり潮の引きたる浜に見てあつ

第一歌集。詩の世界が充実しており、言葉へのこだわりが感じられる。牡蠣の身の質感から曇り日を引き出すところ、また海辺のごつごつした感じを牡蠣殻と喩えたところなどを山下氏が評価。海辺〈かいへん〉という言葉の選択もよい。「比喩の美しさが抜きん出ている」という意見は小田から。組み合わせの意外性、それでいて読者を置いていかない、納得しうる表現であることが評価された。桜川氏は歌の持つ詩的、ポエムとしての側面に注目。その上で

- ・景物はぬれて映れりみづうすく張りてひらける人の眼に

捉え方がよい。視点の面白さもあり、その視点を短歌として表現する技術もあるとした。

松本千恵乃『霧のメロディア』

第二歌集。第一歌集に続き、一首一首の独立性が歌に力強さをもたらすことに注目。直球の歌がわかりやすく読者に届くという意見がでた。また作者の姿が立ち現れてくる点もよいと評価された。

- ・めずらしい鳥が来てるよやんわりと夫が言うとき用があるのだ
- ・〈うそ〉追加の記入にも慣れパルさんが蕎麦は〈そ〉の欄に一を書き込む

日常の切り取り方、旅行で実際に作者が目にしたであろう現場そのものを歌が訴えてくる点に注目。夫と作者とが二人で過ごしてきた長い時間を思わせる場面や、飲食店での細やかな観察、夫や店員へのまなざしによって、作者と相手との関係が見える点が評価された。

選考にあたり、上川氏の歌集については短歌の詩的側面から、松本氏については境涯詠という点からそれぞれの特徴が認められ、今回は二作品を受賞作とすることで意見が一致した。

そのほか、岩永氏の歌集からは作者の身廻り、特に家族について丁寧で優しく温かいまなざしが読み取れる。視野を広げテーマを広げていくと歌集全体の構成としても幅がでるのではないかという意見。太宰氏の歌集からは揺らぎを受け止めようとする姿勢が見られる。表現の面白さもある。歌数を増やし、歌集としての厚みを期待したいとの意見が出た。

今年度は応募作品以外にも注目する歌集が出版されている。短歌という文芸の裾野を広げるという点でも多くの方からの積極的な応募をのぞみたい。

【俳句部門】

公募制となった昨年は残念ながら対象句集がなかったので、今回、俳句部門にとっては最初の選考となった。

公募があった作品は出版年月日順に『芬陀利華』と『一点』の二作品であった。これらに対し長時間に亘り、討議を尽くした結果を左記に述べる。

矢野一乗『芬陀利華』

昭和十七年生れの著者は昭和四十一年に得度しており浄土真宗本願寺派教師を務める。その影響が色濃く出た作品として

- ・朝採りの筍供ふ法然忌
- ・汗をもて觚にあやどりし冥意かな
- ・汗忘る臨池の枝も報仏恩
- ・修めしも名聞利養の汗となり
- ・心田を耕しゆかむ法の秋
- ・鮎一つ抓むや晨朝の御座勤め

など、身ほとりの仏教的な素材を巧みに一句に仕立て、しかも格調高い句が散見されるのは評価されるところであった。しかしながら、そこに専門的な仏教用語かと思われる難解さがあったのも否めなかった。また、歴史的仮名遣いに誤りが幾つか認められたのは残念だった。

吉田葎『一点』

昭和二十七年生れの作者の第一句集。平成二十一年に「空」に入会、柴田佐知子氏に師事した後、令和三年までの三六一句を収める。長く教職にあった句の特長は

- ・赤ん坊も鉢巻締むる秋祭
 - ・なまはげをひるませてゐる嬰の声
 - ・前脚で突つ張る仔牛花はこべ
 - ・心に見上ぐる子猫貰ひけり
- 幼子のこゑに発条あり蝌蚪の紐

という人間を超えた幼きものに対してできえ、慈しむような作者の視線の温かみを認めることができる。その集大成ともいうべき句、

- ・武器持たぬ手のひらひらと大焚火

をもって一集を閉じていることを考えてみても、この慈愛がこの作者の芯を成していることは容易に考えられる。

吉田氏は令和三年、第35回俳壇賞を受賞した。その際、

- ・どいてどいて牡蠣焼く炭火通ります

という飄逸自在な作品が目をつけたが、この根底には、

- ・産むときの口して鮭の死にゆけり
- ・道具みな数へなほして三尺寝
- ・まづ脚でたしかめ蛸が頭出す

といった細かいところにまで、よく写生の眼が行き届いた作品があることに信頼が持てる。

以上、検討を尽くした結果、『一点』の幅の広き詩性が群を抜いているとの結論に達し、本年度の受賞が決定した。

【川柳部門】

本年度の選考対象は『一会の旅』三原洞南川柳集であった。この句集について三名で慎重に協議を行った。

三原洞南氏は退職後、「西日本新聞社川柳十七会」に入会、その後「番傘川柳本社」同人、「福岡番傘川柳会」を経て、昨年『一会の旅』を上梓された。

本句集は五百三十句余が収められており、洞南氏が生業とした新聞を通しての多彩な経験と広い視野そして温かな人柄がページごとに漂い、時に厳しく、時にクスリと笑わせてくれる作品にあふれている。その一句一句には読み手に安心感と感銘を与えるものであり、それは正に、氏のこれまでの人生の「道のり」に他ならない。

- ・飛び込みのニュースに職場殺気立つ
- ・記者の目が癒着のパイプ許さない
- ・大笑いすれば仮面が邪魔になる
- ・ケロイドの瓶に昭和が呼吸する
- ・花びらの裏に涙を見てしまう
- ・納豆の糸に命がぶら下がる
- ・正解をすらすら言えて不合格

ニュースの現場の緊迫感漂う句や、少年期の戦争体験から生まれる反戦句には実体験の重みを感じられる。また、人生の不条理を詠みながら、笑いの中にもペーソスが漂う句の数々は、作者の人生経験がなせる業であろう。

「納豆に命がぶら下がる」は秀逸との評価を受けた。

一冊を通して、川柳という文芸の人間味、穿ち、軽み、ユーモアを共有できる句集と言えよう。

平易な言葉を並べながらも、体験に基づいた核心を突く視点と説得力のある表現力を高く評価し、全員一致で福岡市文学賞受賞作に推薦するものと決定した。